

世界文学は日本文学たりうるか？

大江健三郎

OE Kenzaburo

私は、学生のときあまり勉強のできない学生でした。アカデミズムに進む上級生や友人にあこがれをいただいていた。こういうすぐれた世界各国からの、また日本の研究者の方たちの前で話してできますことは、もっとも嬉しいことです。

もう一つ、この国際日本文化研究センターの所長梅原猛さんの、さきのお話では、マリウス・ジャンセン先生は、幾分か土佐の血が入っておられるそうなのですが、(笑) 私は伊予の生れの人間です。伊予の人間にとって、土佐の人間は長曾我部以来非常にアンビバレントな人たちです。(笑) ジャンセン先生がすばらしい研究を書かれた坂本龍馬は土佐からの脱藩に際して、とくに私の生れ育った村のすぐ脇を通過して行きました。私たちは後に残されたまま。この機会に伊予の永年の、いわば日本の近代化の初め以後ずっと土佐に差をつけられてきた思いをマリウス・ジャンセン先生にお伝えしたいと思います。

ご存じの受賞の出来事があって、私の家はパニックに陥ってしまいました。この会の事務局の方にもご迷惑をおかけいたしました。

私の長男の光は、知的な発達に障害を持っております。それとつながって、音にきわめて敏感です。夜おそくまでたえまなく電話がかかってくるうちに、このところなかったような大きい発作を起こしました。私たちは発作後のことをとくに心配したわけです。そこで私は、熟慮してのことですが、電話を壊してしまいました。(笑) この研究所からも電話をしていただいたけれども、通じないということがあったのではないのでしょうか。ジャーナリズムの方にも迷惑をおかけしました。私の家内の懸念しますのは、こういう破壊的な人間が、スウェーデン・アカデミーの賞にふさわしいだろうかということで、(笑) しかし、私は平和賞をもらったわけではありません。(笑)

光は、花束についていたカードと電報を全部まとめています。そしてこういうことをいいました。

「パパは、学者の方にお祝いをいっていただきました。パパは作家の方にも喜んでいただきました。しかしパパのことは、芸能界では喜ばれていないようです。」(笑)

そこで、電報の新しい束が来るたびに、その方面のを心待ちするうち、ついに林家こぶ平さんのものを発見したのです。(笑) それは、「先生、僕はうれしい」という文面でした。

私は後でのべます理由から、この講演を書きなおしていましたが、どなたにもお礼の手紙を書いておりませんでした。一通だけこぶ平さんに手紙を書いたのです。

ここには外国からのすばらしい専門家が集まっていっしょにいますけれども、先生方は、学問の専門家であって、日本の芸能界のことはご存じないと思います。そこで私がこれから申し上げることについて、なぜ私がそのような文体の返事を書いたか、それはどのような人に影響されている文体かが、おわかりにならないんじゃないだろうかと心配します。さらに同時通訳が難しい

だろうとも思います。

私たちの世代の文化英雄^{カルチュラル・ヒーロー}として重要なひとりに、林家三平という革命的な落語家がいいたのです。こぶ平は三平の長男です。

そこで、私は三平の文体で手紙を書いたのです。短いものですから、注意深く聞いていたいただきたいと思います。

「ノーベル賞もらってどうもすいません。もう大変なんすから。」(笑)

さて、もっと大きい問題も生じていたのです。この会のために私は草稿をすっかり書きあげていました。ところが、それを書きかえなければならない状態が生じたのです。そのことからお話しいたします。

私は、草稿を日本文学と世界文学の現代における具体的な関係ということをめぐって書いたのです。そこで私は、三つのラインに日本文学を整理して、日本文学がどのように外国文学と、あるいは世界文学と関係しているかということを論じたのです。

第一の日本文学は、世界から孤立している。東西ヨーロッパから孤立しているし、アメリカからもラテンアメリカからも切り離されている。アフリカ、そしてとくにアジアからはさらに孤立したものです。

韓国のすばらしい詩人金芝河の最近の仕事は、北アジアの世界性、普遍性ということをめざしているようです。その「世界性」という言葉は、金芝河さんの話を聞いていますと、フランス語での、「トタリテ」に近いはずだと思います。つまりは世界性というよりも、全体性といった方が日本語では通りがいいと思いますが、北アジアには全体性がある、というのです。さらには普遍性もあるといえます。そのようなアジアの文学ともっともことになっているのが、この第一のラインの文学なのです。それを代表するのは、谷崎潤一郎であり、川端康成であり、三島由起夫でありました。そして、このラインは、川端さんがノーベル賞を受けたことで、すでに世界の文学として認められていたといつてよろしいのではないのでしょうか。谷崎潤一郎はプレイヤード版の準備が進んでいますし——もう出たのだったかも知れない——、三島由起夫はとくにその劇作において世界の現役です。

第二のラインは、世界の文学から学んだ者たちの文学です。フランス文学やドイツ文学や英文学から、あるいはロシア文学から学んだ。その上で、独自の経験に立って日本文学をつくった。世界文学から学んで、日本文学をつくって、できることならば世界文学に向かってフィードバックしたい。そのように願っている作家たちのグループであります。

それを私は、世界文学が日本文学になった、という性格のものといいたいのです。このラインには、大岡昇平がいました。すばらしい作家、すばらしい人でした。そして安部公房がいました。この会場には安部公房の各国語の翻訳者たちがいらっしやいます。そしてこのラインの後尾に私の文学があると思っています。

第三はどういうラインかと申しますと、村上春樹、吉本ばななラインと私は呼んでいるのです。このラインは二人しかいませんが、それだけで十分、第二のラインの二百倍の売れ行きを示しています。(笑) これは、世界全体のサブカルチャーが一つになった時代の、まことに典型的な作家たちだと私は思います。

二十年前のことですが、私はメキシコシティに半年ほど滞在して、コレヒオ・デ・メヒコで

講義をしていました。そのときに、オクタヴィオ・パスさんとお会いしたのです。

私はパスさんからこういう話を聞きました。彼の書いた文章にもありますが、ニューヨーク、ロンドン、パリ、モスクワ、ベルリン、メキシコシティ、東京、その全体を一つのサブカルチャーがとらえるような時代、それがすでに現在ある。やがてそれは新しい文学をもつくり出すだろう。

現にこの村上春樹、吉本ばななのラインは、そういう存在としてかれら独自の文学をつくり始めているのです。現に、かれらの作品の翻訳はアメリカで注目され、イタリアで広く読まれています。世界的に認められているといっているでしょう。

そうすると、世界的に認められているラインは、谷崎、川端、三島、そして村上、吉本ラインで、中間に陥没があることになります。このへこんでいるところに大岡、安部、大江が落ち込んでしまっているわけですね。

安部公房の『砂の女』は天才的な予感によって書かれた、といっているかもしれません。砂丘の穴ぼこに落ちた人間の物語です。私の『万延元年のフットボール』も、主人公は、その冒頭、こちらはスケールが小さいけれど、裏庭に掘られた穴ぼこの中にいます。大岡さんはそれほど被虐的な人ではありませんでしたから、収容所にいた経験をリアルに書いていられるのみですが、ともかく私たちは陥没していた。それは、わが国の代表的な学者・批評家佐伯彰一さんが率直にいられることです。

そういう分類に立って、私はこういう論理を組み立てていたのです。私たちの文学は、本当に世界から学んで来た。世界の文学から多くを、それも本質的なことを受け入れて、自分たちの文学をつくった。しかし、第一のラインのように、私たちの誰かがノーベル賞をもらうことはなかった。第三のラインのように、アメリカとイタリアで——国内のことはここではいわぬとして——よく売れることもなかった。私たちは、世界から最も豊かに受けとったけれども、世界から最も早く忘れ去られてゆく者らではないか？

もうひとつメキシコにことよせていいますと、アズテックの神話に、ケツアルコトルーという神様がいます。彼は眼が青かったといわれています。そして民衆の間から驚だったか、鳥になって去る時、もう一度帰ってくると誓われた。ヌエバ・エスパーニャの侵略のとき、スペインから来た征服者の青い眼を見て、インカ帝国の最後の寛容な王様は、この人はケツアルコトルーの再来かもしれないと思った。そしてかれを進んで受け入れ平和的な関係を結ぼうとして、殺されてしまった。

私たち第二のラインの作家たちは、あのインカの寛容な王と同じような西欧への態度を示したあげく、同じ運命をたどるのではあるまいか？ 国内的にも国際的にも少数派となって、大岡さんの『野火』とか、安部さんの『砂の女』とか、私の『万延元年のフットボール』は、テオティワ坎ンのピラミッドのようなものとしてのみ記憶されるのではないか？

そういう話を序論として、私の講演は展開していたわけなのです。ところが、この講演プランはあの出来事によって崩れてしまったのです。(笑) スウェーデン・アカデミーから、知的なユーモアにみちた人柄の感じとられる声の電話がかかってきたとき、私が思ったことは、「あの講演をどうしよう」ということでした。もう三日しかないことですしね。(笑)

それでも私は新しい構想の手ざぐりを始めたのです。このような学者、研究者たちの前に立って、フリーハンドで話す勇気のある作家がいるのでしょうか？ 原稿を書き上げて、それを清書し

ておりましたが、時既におそく同時通訳の方に犠牲を強いることになりました。許していただきたいと思います。皆さんは声だけを聞いていただけますが、とても美しい人です。(笑)

さて、私が新しく考えた話の筋みちは、こういうことです。世界文学というけれど、それは定義しうるものだろうか？ 世界文学ということで、具体的なイメージはもとよりあります。私などは、トーマス・マンが行なった『ゲーテとトルストイ』というすばらしい講演のことを思います。そこでトルストイは世界の文学だとトーマス・マンはいつていると思います。ゲーテももちろん世界文学である。しかし、ドストエフスキーはそうではない。これはロシアの文学だ。シラーの文学はドイツの文学であるというのがマンの確信でした。

そうした考え方を厳密に抽象化してみるとしますと、世界文学の定義はじつは難しくなるのではないかと私は思うのです。たとえば、トルストイ、ゲーテの特質を、マン以上にたくみに数えあげうるでしょうか？ それでいて、私にはマンもまたこの命題には不十分な気がするのです。

そこで、世界文学という定義のかわりに、世界言語ということを考えてみてはどうかと私は思いついたわけなのです。

私のみならず、たいていの小説家は学問をした習慣がなく、かえって学者、研究者に向けての発言は構えが大きすぎるのですが、ともかく私は世界言語というものがあればいいと思います。世界言語が実現すれば、それが文学者の夢であろうと思います。

もちろん文学は、ある国の幾つもの言語のひとつによってのみ実際にはあるわけです。

まず、一国の多数の言語ということといえば、日本にしましても、単一民族という幻想は政治家たちが広めようとしてきましたが、すでに破産している考え方です。それを確認するために、文学的に何が有効な方法かと申しますと、アイヌ語のユーカラを読めばいい。琉球語のおもろを読めばいい。そして日本語の万葉あるいは記紀歌謡と比べればいい。それだけで、いかにも徹底的に日本の単一民族説は幻にすぎないことが、私どもにも自覚しうるのです。そういうことを認めた上で、私は、やはり世界言語を夢見ます。

そういうことを考えながら、私が端的に思い出しますのは、フランソワ・ラブレーの『ガルガンチュアとパンタグリュエル』の第二の書、すなわち『パンタグリュエル物語』第一巻の一つのシーンです。私は大学でも個人的にも、渡辺一夫という大学者に教わりました。大学者が教えても、生徒は学者にならない例ですが、私の一生は、渡辺一夫の光のもとにあります。そこで繰りかえし渡辺一夫の翻訳を読むのですが、パンタグリュエル王が、あの愉快的パニユルジュと初めて会うシーンです。旅をしてきたパニユルジュはお腹がすいています。お酒も飲みたい。さらにはベッドに入りたい。だれかお金を持っている人が現れて救ってくれないかと期待しているわけです。

そこへパンタグリュエル王の一行が通りかかるのです。パニユルジュは、外国人が来たと思って、自分の国の言葉とは違う言葉で話しかけます。初めドイツ語で話す。それからアンティポードの言葉で話します。これは十六世紀に、先ほど申したヌエバ・エスパーニャが発見されて、別の半球を「アンティポード」と呼ぶやり方があった。その言葉と仮に考えられていたもので、それからイタリア語、スコットランド語、バスク語、オランダ語、エスパニア語、デンマーク語、ヘブライ語、古代ギリシャ語、ガスコニュ語、ハンガリア語、ブリュターニュ方言と次つぎに話しますが、通じない。とうとうあきらめて、フランス語で話したおかげで、食べ物と酒とベッ

ドをもらった。

ここには世界じゅうに通じる普遍的な言葉がありえるかどうかについてのラブレーの考え方が出ていると思います。

日本で、こうしたいろんな言葉で話そうという勇敢な、しかも有用な働きをしていられるグループがあります。日本における異文化間の医療をすすめるグループです。いま日本にさまざまな言語的背景の外国人労働者が働きに来ています。かれらに、精神面でまた肉体的に異常を起こされる方がいます。例えば、ノイローゼになって、胃潰瘍になる方がいられる。そういう人たちを救うための会です。

実際に十数カ国の言葉を使って、医療をする場所がつくられています。国際交流基金がここに援助を与えられることを心から望みますが、(笑)例えば、シンハラ語だけを使うスリランカから来た青年が病気を訴えます。医療相談には、シンハラ語が母国語だけれども、英語も使えるという青年が一緒についてきます。そしてシンハラ→英語→日本語という通訳が行われ、病気の治療が行われる。しかも、その必要な治療が効果を上げているのです。私はすばらしいと思います。

一般に日本人は、とくに知識人は、外国語について、必要かつ十分な語学教育ということを考えてきたと思います。ほかならぬ私なども、外国人に話しかけられると、必要かつ十分な英語しか話したくないのといって、逃げまわろうとするということがあります。(笑)

ところが実際には、必要かつ不十分な言語でいいのではないか? こうした診療所で、医師も患者も双方ともに必要なことを切実に話す。それは語学的に不十分なものにちがいません。しかし、その不十分な言葉で自分を訴えると、思いがけず深い理解が生じることがあるのです。それが言葉のおもしろいところ、文学のおもしろいところだと私は考えています。

この点について、私の障害のある息子の言葉の世界について例に引くようにして話をしたいのです。この光という子供は音楽をつくっています。かれは現在三十一歳ですが、言葉によっては三歳か四歳程度の自己表現しかできないでしょう。ところが、バッハとかモーツァルトの音楽の言葉を通じて世界を理解し、それをあらためて世界に返すようにかれ自身を表現しているわけです。音楽というものは、もとよりそれぞれの民族、国、地方の差異はきざまれているのですが、それでいて世界言語に近いのではないかという気持ちを私は持っています。

あるスポーツ新聞の文化欄によりますと、この京都で光のCDがよく売れているというのです。ベストセラーとっていいほど。なぜかという、それは不眠症の人のためにいいからだ、というのらしい。眠れない人が聞くといい。京都でいまだという人が不眠症に苦しんで、光の音楽を聞いていられるのかを考えますが、そのうちいくらはこの会議の事務局の人じゃないかと思っています。(笑)

私もあまり本の売れない純文学の作家として、自分のために宣伝したいと思うのですが、光の音楽を聞いてなお眠れない人は、かれの父親の小説をお読みにになるといいのではないか?(笑)

音楽という世界言語は、ルネサンス期のラテン語に似ているかもしれないと思います。例えば、エラスムスのラテン語を考えれば、それはヨーロッパという限られた世界ですけれども、やはりあきらかに世界言語だったのですから。いまクラシック音楽を聞く人たちの世界を、ルネサンス期にラテン語を話したり書いたりした人々のそれに重ねてみて下さい。

そして、エラスムスとラブレーの深い友情、さらにいえば師弟関係というようなことを思いま

すと、フランス語という世俗の言葉、限られた流通範囲の言葉で書いたラブレールと、ラテン語で一生表現し続け知的交通を開いたエラスムスとの関係が意味深くとらえなおしうのではないかと思います。あわせてスピノザもさらに徹底した世界言語の使い手といえるのではないかと私は思います。

じつは私は、今書いている小説を書き終えましたら、もう小説は書かず、少なくとも何年間かスピノザを読んで暮らそうと思い立っていました。四日前まで私どもにとって、とくに私の妻にとって深刻な問題は、家庭の主がスピノザを読んで四、五年間過ごすとなると、生活するお金をどうするかということでした。今は何万クローネかを持っていますから、スピノザを読んで暮らす条件はそろったのです。スピノザの、この世界についての根本的に楽観的な思想は、どうも正しいのじゃないかと思います。(笑) そのまま再び何も書くことはなしに死ぬことになっても、私個人は幸せだろうと思います。

私はもともと若いころからスピノザを読んで来たのですが、そのきっかけは独学の小説家らしくバーナード・マラムッドの『修理屋』という小説を読んだことからです。その最後に、スピノザの一句が引用されていました。《国家が人間性質にとっていとわしいやり方で行動する場合には、その国を滅ぼす方が害悪が軽微で済む。》

私はいつまでも回心しない戦後民主主義者として、この考えに賛成しました。そして、少しずつその翻訳を読みながら、やがて年をとれば、スピノザを終日読む態勢をつくろうと思っていたんです。こういう本当に巨大な思想家には、片手間に立ちむかうことはできませんから。

マラムッドがこの小説を書いたのは、今から三十年以上前のことですから、もちろんソビエト圏は崩壊していませんでした。スターリン主義の崩壊あるいはソビエトの崩壊とさきのスピノザの言葉は比較しうるかもしれない。さらにわが国の民主主義体制には、《国家が人間性質にとっていとわしいやり方で行動する場合》を許す制度が遺っていると私は考えています。

もっと具体的に世界言語を考えるとしますと、日本の文学者で世界言語ということ考えた人としては、宮澤賢治がまず思い出されます。宮澤賢治は、おそらくエスペラントと日本の東北地方の方言を結んだ美しい言葉を考えていました。それはほかならぬ世界言語をかれが考えていたということでしょう。

もうひとり、安部公房です。安部公房の初期の作品に『壁』という傑作があります。その最後ちかくに、こういう一節があるのです。

《真暗な宇宙を、一冊の書物が飛んで行くという詩ね。今のぼくらが丁度それじゃないか。あの詩は予言だったね。ぼくらは書物だ。そして地球に対立する一つの星なんだよ。見たまえ、ぼくの言うとおりにすれば、早速プランが具体化されるだろう。》

地球に対立するもう一つの星としての書物という安部の着想は、夢見られた世界言語のメタファーということではないでしょうか？

安部公房の、生涯の最後に持続的な関心の対象となったもの、それはクレオールという言葉でした。安部公房のクレオール理解には、幾らか不正確なところがあるように思いますが、それだけに独創的なおもしろさもありました。安部公房は、人間の脳の具体的なある器官とクレオールをつくり出す言語本能というか、言語的潜勢力というか、人間にそなわっているものとを結びつけようとししました。人間の脳にその小さな器官が現れた時、人類は猿とはまったく違うものになった、

というわけです。

ラブレールもそうでしたが、安部公房はもともと医学を学んだ人でした。そして、医学的に、あるいはもとより本質的に文学の人ですが、文学を科学につきあわせて考えようとする態度を持っていた。人類がどのように人類となったか、どのように社会をつくったかという、発展と、この言語機能に関わる脳の一器官の発生とは結びつけることができるはず、と安部は考えていたのです。

これは広く内外で認められていることですが、安部公房という作家は、日本で最も世界的な作家でした。しかも、言語についてこうした人類に普遍的なレベルということを考えたのは、やはり安部さんに日本語は限定された言語だという思いがあったからではないでしょうか？ しかもそれは非常にづらい思いであったのではないかと私は思います。すなわち安部公房は世界言語で書きたかったのではないかと私は思います。

それを考えますと、私の受けることになった賞は安部公房にもっともふさわしかったのです。かれが亡くなっていなければ、大岡昇平と私をつなぐラインのなかで当然かれが賞を受けていたことでしょう。

もうひとりの偉大な現代作家について語りたいと思います。ミラン・クンデラ、この人もやはりラブレールに深い洞察を示している知識人です。寛容の精神、あるいは笑う精神ということを使う人。自分と違った制度に対して寛容であり、あまりまじめ過ぎる人間のことは笑う。ラブレールにつながるそうした精神を「小説の精神」と呼んで、それは十九世紀のヨーロッパが完成したものだとかれはいいました。

クンデラがイスラエルについて演説をしたことがありました。イスラエルという場所は、ヨーロッパの外にあるヨーロッパの心臓のようなものだというのがかれの論旨で、それはつまりヨーロッパを象徴する「小説の精神」の土地ということです。このように多様な国々から集められた皆さんには、イスラエルについての評価はそれぞれおありでしょうが、ヨーロッパの言語をひとつの世界言語として構想する態度がミラン・クンデラにあることをこの考え方はほのめかしてはいないでしょうか？それもかなり具体的な触感において。もっともクンデラは、自分の作品の翻訳にとっても厳しい人です。たとえばイタリア語に訳された自分の作品について、それは違うと、非常に厳しい文章を書いていたはずで、ヨーロッパにおけるチェコ語と他の言語の違いにかれはきわめて敏感なはずですが。

ところで、言語の個別性と普遍性ということでおもしろいことがあります。クンデラの作品に、むしろフランス語で書かれたのではないかと感じられるような小説があるのです。『不滅』という小説。『不滅』を、パリで亡命者として暮しながらもちろんかれはチェコ語で書いたのですが、仏訳を読んでいるとフランス語で発想されたんじゃないかと思えるようなところが随所にあるのです。それはむしろ地域的な言語としてのフランス語の産物という感じなのです。

ところがクンデラの若いころに書いた、それこそ不滅の傑作といっているものの、『冗談』があります。これはチェコの都市といくつかの小さな地方の村を舞台にチェコ語で書かれている。しかし、『不滅』に比べて、『冗談』という小説は本当に世界的なもの、普遍的なものです。『冗談』には、バルトークの音楽についての研究者が出てきたはずですが。バルトークによる民族音楽の収集を研究している人だったかな。実際にクンデラのお父さんがそういう専門家だったとも読んだ

記憶があります。民族音楽の収集と世界言語、そこまではゆかなくても、ヨーロッパ言語と並べて考えると、鍵が見えてくるかもしれません。私はかねがね、武満徹や一柳慧という自覚的な大音楽家たちと協同で研究する、ヨーロッパからの楽理の専門家を待ち望んでいます。かれらに日本語、日本人の音楽もくろみこんでこの鍵から大きい扉を開いてもらいたいものです。

さて、私はこのミラン・クンデラの運命ということ、もちろん皆さんこそがよくご存じのことではありますが、ミラン・クンデラと東ヨーロッパ文化の運命ということを考えるのです。

第二次世界大戦の終了とともに東西冷戦が始まった。とくに東側の戦後の新しい体制が作られるなかで、ソビエトの勢力圏に組み入れられた土地の民衆が西へ移動していった。そのことについて、ルーマニアの外交官だった過去を持つ比較宗教史のミルチュア・エリアーデが日記においてそれも永い時期にわたって、何度も何度も憂えています。

東ヨーロッパの土地と歴史に根差している文明がある。それは東ヨーロッパにおけるユダヤ人、アシュケナージの文明といいかえていいかもしれません。もとより、ユダヤ系でない人たちの文明もあるわけですが、東ヨーロッパの人間が大規模な移民、亡命者として西ヨーロッパの方に移動してしまうと、東ヨーロッパの文明全体が稀薄になり、浅くなるのではないかとエリアーデは嘆きすらしていたわけです。

そうした亡命者のなかでも筆頭格とっていいほどのミラン・クンデラはパリに亡命しています。かれはこれからどうするのか？ 東西冷戦はいまや終結した。そこで、五十年間の大々的なディアスポラとでもいいますか、民族的な大脱出も帳消しとなるのか？ 亡命していた知識人たちはすんなり東ヨーロッパに戻ってゆけるのか？そして圧迫されていた自分たち独自の文明を回復させるのか？たとえばクンデラとかつての僚友ハベル大統領との関係は、かならずしもうまく行っていないようであるけれど。ともかくそこには、世界文学が直面している二十世紀最大の課題があるはずです。

もしベンヤミンが生きていれば、それはかれの大きい主題となったでしょう。生きている人であれば、ギュンター・グラスはドイツが再統一したときに——たまたま、私は公開討論しました——、進み行きに沈鬱なほど冷静でした。グラスは、ポーランドの人間の眼で、あるいはチェコの人間の眼で、すなわち再現される大ドイツの周辺の小さな国の人間として、この問題を見たいといった。それはミルチュア・エリアーデからベンヤミンに至る人たちならやったであろうように、ということではないでしょうか？

それから、もうひとり、元外交官といってもエリアーデとはすっかり肌合いが違いますけれども、アメリカ人のジョージ・ケナンという外交官出身の学者のことをよく知っていられると思います。かれはエリアーデと逆に、むしろ東西冷戦の装置を作った側に属していた。冷戦の五十年にかなりの責任を持つ外交官でありました。

しかしかれは、外交官の職を去った後、大きい回心をとげたと思います。徹底的に自分の、またアメリカの外交の積み上げたものを批判することをした。そして独特な思想家となったのです。東側から西の方へ人々が移動していくことを憂えるという点では、ジョージ・ケナンも早くからそうでした。ケナンとエリアーデには一組の思想家と呼んでいい側面があるのです。

さてケナンは、私ども日本人にとって重要な人です。かれは、核兵器、原爆、水爆について深い思考をする人でした。私どもは、広島と長崎の経験を持っていますが、はたして日本人はそれ

を本当に思想化したか、日本文明の問題として考えてきたか？あるいは、日本人の文化の問題としてとらえてきたかという、私はそうではないのではないかと考えています。それは日本の作家として恥ずかしい告白になりますけれども、アメリカの外交の専門家であるジョージ・ケナンが、その方向へ先行して私たちにヒントをあたえてくれているのです。

もし、人類がもう一度、広島、長崎のような核戦争を行うならば、どうなるかという問題を提起して、ケナンは次のように書いています。少し長くなりますが、私自身の訳で引用します。

《われわれがそれについて話している文明は、われわれの世代のみの所有ではない。われわれはその所有者ではなくて、単に保管者なのである。それはわれわれより無限に大きく、重要な何ものである。それは全体であり、われわれは単なる部分である。われわれがそれを達成したのではなく、ほかの者たちが達成したのだ。われわれはそれを創造しなかった。われわれはそれを受け継いだのだ。それはわれわれに与えられた。しかも次のような暗黙の義務とともに与えられた。それをいつくしみ、よく保ち、発展させ、望むべくは改良して、あるいは少なくとも壊さず、そのままにわれわれの後にくるべき者らに渡せという。そのような暗黙の義務とともに。》

そして、核戦争をもくろむことはそういう世界をわれわれが破壊しようとしているのだというわけであります。この思想家の文章を、私はせんだって人間の身体について考えながら引いたことがあります。ここではあらためて、世界言語という夢によりそわせて読みなおしたいのです。私たちは自分たちの言葉について、つまり日本語について、英語について、フランス語について、あるいはわれわれが夢見る世界言語について、こういうことをいえないでしょうか？

《われわれがそれについて話している言語は、われわれの世代のみの所有ではない。われわれはその所有者ではなく、単に保管者なのである。それはわれわれよりも無限に大きく重要な何ものである。それは全体であり、われわれは単なる部分である。》

私は、ジョージ・ケナンの核兵器と文明についての考察を、身体や言語の問題として展開しつつ学びたいと思っています。まさにかれに学んで、広島と長崎の課題を日本人が経験した二十世紀最大の出来事としてとらえなおすならば、そのとき初めて日本人はこの世紀末から次の世紀に橋渡しすべき思想を、あるいは文明をかちとりうるのではないのでしょうか？

マリウス・ジャンセン教授のすでに古典的となっている定義のとおり、またテツオ・ナジタのような新しい歴史家の再定義のとおり、私たちは、江戸時代に始まり維新に続いた近代の発生と展開を、開国以後の第二の近代でうまく生かすことができなかった。むしろ逆行する仕方です。深い奈落のうちに落ち込み、そこに広島、長崎の閃光がきらめいたのでした。

私の『万延元年のフットボール』という作品は、たまたまそのテーマに小説家の非力をかえりみず立ち向かったものでした。われわれはゆがんだ、貧しい近代をつくってしまった。そして大きい戦争を引き起こして、悲惨な経験をした。その頂点に広島と長崎があります。そのことをわれわれは自分たちの文化の問題として、文明の問題としてあらためて徹底的に考えるべきではないか？それが私たちにとってついに世界言語を構想することにもつながる仕方です。世界の文学に参加するための出発点ではないか？

広島、長崎のあの大きい犠牲は、償われなければならないと思います。償うのは私たちです。また、広島、長崎にいたった、そしてそれ以後も決して完全に治っているとはいえない国家の病患から、私たちは回復しなければならない。それをなし遂げたとき、初めて私たちの文明、私た

ちの文化は——もとより文学も含み込んで——、二十一世紀に向けての地球規模のプラン、それも具体化しうるプランに参加しうるのではないのでしょうか？

私が小説家としての暮しに長い休暇をとり、スピノザを読んで暮らすことにしましたのも、自分の生の終りをひかえて、そのような苦しい希求につき動かされるからなのです。そのような私にも様ざまに教示をあたえてくださるはずの、日本研究京都会議のご成功を心から祈るものです。